

ホトトギス

昭和二十四年二月二十八日出版  
今和六年二月一日発行  
第百二十七卷第二号

# ホトトギス

二月号





旬日記

廣太郎

令和五年二月一日 NHK文化センター

句座といふ碧梧桐忌の縁かな  
早々と忌日近付き日脚伸ぶ

日当たりてより梅が香の立ち上る  
鳥語ふと止みて一山呀返る

梅三分咲いて華やぐ城下町  
二月十六日 登高会

春近し遠しと風の聞き合ひ  
数巻の風に浮足立つて浮寝鳥

梅が香に誘はれゆく歩幅かな  
爆音に追ひ立てられて春の雲

紀元節人は歴史を繰り返す  
寒明や碑の文字を謎めいて

蒼天に雲遊ばせて風牙ゆる  
風に耐へ水仙色を放ちゆく

温む水鯉の胸鰭より生るる  
追ひかけて追ひかけられて鴨帰心

春時雨蛇の目に楽を奏でつつ  
猫の恋玉逝きたる家の納屋

蕉像の凍死するかに青ざめて  
二月三日 六甲会

春水をのたり凹ませ鯉の鰭  
二月九日 土筆会

梅が香に順路自づと出来上る  
瀬戸内の波紋り込み若布刈舟

海苔掻くやアクラインを見上げつつ  
一本の傘は曲者春の雨

春菊の縮みゆく香を放ちゆく  
屋根裏の交響曲や猫の恋

木の実植う山の生活も今日までと  
二月二十六日 青嵐会東京例会

節分や家の歴史も節目とし  
海苔干して干して離島に老いにけり

菊菜煮て老舗の女将七代目  
二月十三日 朝日カルチャー若草句会

大なる忌日を明日に近返る  
天上に集ふ一門 瀬祭

汀子邸節分の門開け放ち  
二月四日 芦屋ホトトギス会

春浅し遠退きパレスタインデー  
春浅し白銀と化す都心かな

天国の君に届けと野火煙  
二月二十六日 野分会東京例会

夢に会ふ二月礼者となりて君  
人生きて逝きて大地は下萌ゆる

喝采を空に放ちてクロツカス  
雨降つて止んでは降つて春浅し

汀子忌や野の花全に供華として  
春立つや帰天の君に見守られ

梅が香や庭への扉開くより  
二月五日 野分会芦屋例会

クロツカス揺れて囁き聞こえさう  
二月十四日 大阪倶楽部選者吟

燭揺れてより春めける忌日ミサ  
目鼻無き雛に汀子の笑顔かな

世の光地の塩となり春立てり  
二月五日 青嵐会芦屋例会

嵐山輪郭 灰と春時雨  
忌心を携へ二月礼者かな

凍解の下の魂 叫びかな  
いぬふぐり青き地球をさら

早春や偲ぶ心の育ちゆく  
一周忌近付いてくるしよしゆんかな

緋づ折り捧げて二月礼者かな  
二月十六日 北國文芸選者吟

陸月にふ虚子門にある憂ひかな  
天上に放つ忌心いぬふぐり

髪切つてより春の風邪近付き来  
二月七日 不動の庭で遊ぶ会

春浅し土解れゆくほぐれゆく  
二月十六日 前議員句会

悲しみもやがて思ひ出凍ゆるむ

総門の金極まりてより余寒  
老梅に紅の明るさ灯しゆく

春浅し官邸固く閉ざされて

# 雑詠 廣太郎選

暑がりの看取り娘に残暑かな  
見舞客集へばビールワイン酌み  
虚子の月杞陽の月を賜りて  
再会の露けき句碑の懐に  
能管の高音の射貫く秋思かな  
十六夜の雨のゐすわる旅枕  
病人のための一粒マスカット  
月の秋未完に終る俳句帳  
旅立ちの一張羅なり蘭飾る  
建具屋の匏ひからす油照  
空蟬の裂け目が風の笛となる  
砂日傘傾げ愛するひとを待つ  
蘭の秋一鉢ごとの月日あり  
鉦叩鳴きやみさうに鳴きだしぬ  
露けしや見上ぐるほどに星ふえて  
恩師みな天にありけり夜の秋  
朝露を踏んで浄土を行くごとし  
銀漢を故郷のやうに仰ぎけり

横浜 岩本桂子

同

西宮 本郷桂子

同

東京 田丸千種

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

真つ新な心九月の頁繰る  
今生の大地の血潮曼珠沙華  
清音に濁音混じりくつわ虫  
足首の濡るるも萩の露になら  
言の葉に人のつながる子規忌かな  
宇治の月水音昂ぶる戻り橋  
山頂に風の径あり赤蜻蛉  
鱚雲てふ美しき不吉かな  
秋刀魚食ぶ日本に海のある限り  
男湯の静寂に落つる十日月  
スポーツの日を漫喫の筋肉痛  
猿酒を飲み異次元の嘘を吐く  
山雨去り暮れて一山虫の間  
山寺を埋めて一面霧の海  
溝萩を活けし受付峰の寺  
ホトトギス四代と生き生身魂  
よれよれの句とて生き甲斐生身魂  
役に立つことも少しは生身魂  
枝先の風に始まる初紅葉  
露消えて現世の音戻りたる  
綴りたる露けき言葉詩となりぬ  
まづ神へ奉りたる今年酒  
くねくねと熊野古道の柿日和  
曲る度どよめき上る紅葉山

神戸 涌羅由美

同

同

和田華凜

同

同

玉手のり子

同

同

酒井湧水

同

同

安原 葉

同

同

木村享史

同

同

湖東紀子

同

同

川口利夫

同

同

雑詠句評（二月号より）

肖子・むつみ・とほ歩  
葉・陶句郎・敦子  
青天子・静龍・中正  
眞理子・廣太郎

流灯の水のところに従へる 高知 橋田憲明

灯籠を静かに見送っているのだろう。その光の揺らめきは川の流れのままに、時にふれ合いまたつと離れゆつくり遠ざかつて行く。水のころ、という表現は、たくさんの灯籠の中の一つを見つめる作者の深い思いと、流灯を観る確かな視線を感じさせる。

（肖子）

盆の間にあの世から先祖の霊を迎え、十六日に流灯に乗せてあの世に帰すという風習は日本では古くから行われてきたが、そんな伝統がしみじみと感じられる。自然の流れに身を任せてこの世とあの世は繋がっているのだろう。（廣太郎）

さわやかや看護にたよる風呂上り 横浜 岩本桂子

ご家族のどなたかが「看護に」頼らなければならぬ生活之余

儀なくされておられるのだ。誰であっても家族に病人がいるという事は生活に制限がかかることは確かな事実。特に「風呂」を使うという事は家族だけでは到底出来るものではなく、しかも病人の為に絶対欠かすことは出来ない日々の出来事なのだ。だからこそプロの「看護」に頼るのは当然。「風呂上り」の病人のさわやかな清々しい様子を見て、家族のみんなもさわやかな気分となりほっとしている姿が伝わる。気持ち良いさわやか看護が伝わる。（むつみ）

作者は残念ながら令和五年九月三日に惜しまれつつ御逝去になられたが、最後まで俳句人生を謳歌されたと聞く。高齢になると、どうしても看護に頼らざるを得なくなるのだろうが、それを爽やかに受け止めている姿勢が明るい。（廣太郎）

朝顔を育て一年生育つ 神戸 藤井啓子

朝顔・秋、八月の季題。  
小学校一年生の写生句。

夏休みの自由研究でもあろうか。朝顔を育て、毎朝、今日は、花が幾つ咲いたなどと、絵日記をつけている……。

こうして、一年生は、すくすく、育っていくのである。

（とほ歩）

確かに小学校の一年生の夏休の宿題の一つに朝顔を育てるといふものがあった。親にも手伝ってもらった記憶もあるが、いよいよ花が咲く頃の朝は楽しみであった思い出が蘇ってくる。人間形成の上でも大切な事なのである。（廣太郎）